

宇喜多氏と備前長船・鉄砲鍛冶

丸谷憲二

1 はじめに

「備前軍記」は岡山藩士・土肥経平が纏めた軍記書である。執筆は江戸中期である。1567 年（永禄 10 年）の明禅寺合戦での鉄砲使用が記録されている。備前国で最初に鉄砲を使用したのが宇喜多直家である。織田信長の長篠の戦いは 1575 年（天正 3 年）であり、信長より 8 年も早い鉄砲の戦闘使用記録である。この鉄砲の生産地として備前長船説がある。「長船町史刀剣編通史」は長船鉄砲の初見を江戸末期の 1827 年（文政 10 年）としている。備前長船説は市川俊介氏が平成 24 年に発表している。市川俊介氏の最後の発表論文である。

2 宇喜多直家は戦闘への鉄砲使用の先駆者

2.1 備前国で最初に戦闘に鉄砲を使用

戦国時代の戦術は、弓矢と馬を使用する騎馬戦術が最先端の戦略であった。

1543 年（天文 12 年）ポルトガル人の種子島漂着による鉄砲（火縄銃）伝来

10 年間で日本全国に普及。・・・須川薫雄説

1566 年（永禄 9 年）

備中成羽城主三村家親が毛利の支援で備中全土を征服。

美作国に乱入し三村家親を遠藤兄弟に暗殺依頼。三村家親を射殺。

長船制作の短筒（ピストル）であったと思われる。・・・市川俊介説

1567 年（永禄 10 年）明禅寺合戦

三村元親 2 万の大軍（備中松山城主）を率いて備前に侵入。

宇喜多直家 5 千の兵鉄砲使用(戦場での鉄砲使用のノウハウ)により勝利。

宇喜多の先手、明石、戸川、長船、浮田忠家の軍勢が繰り返し、繰り返し鉄砲を撃ちかけた。

『備前記』(1717 年成立)の沢田村に、妙善寺崩れの説明が記録されている。

「西方院上ノ山ヲ、妙善寺ノ古城ト云、此城ニ毛利幕下、薬師寺弥五郎、中島大炊ト云者居城之時、沼ノ城主、宇喜多直家目黒村へ出張シテ攻ルト云、・・・」

「其内直家城ヲ乗取、城内へ人数ヲ入、後詰ノ人数ヲ、妙善寺ノ城山ヨリ、目ノ下ニ見下シ、弓鉄砲ニテ射伝故、悉ク討取也、殊ニ俄ノ事ト云、大雨故、毛利家ノ人数ノ、弓鉄砲ハ雨ニ濡テ用ニ不立ト云、直家ハ兼テ、其用意故、悉ク弓鉄砲モ用ニ立、大勢打取給ト云、是ヲ妙善寺崩ト語伝、」

※ 明禅寺合戦の日は大雨でした。毛利は「弓鉄砲ハ雨ニ濡テ」使用できません。しかし、宇喜多は雨対策を知っていました。鉄砲が使用できました。戦場での鉄砲使用のノウハウの有無の差です。

※ 戦場での鉄砲使用のノウハウにより、備前太閤といわれる大領主にわずかの期間でのし上がった。織田信長の長篠の戦いは 1575 年であり、8 年も早い鉄砲の戦闘使用記録である。

2.2 鉄砲を何処から入手したのか。

市川俊介氏(元岡山市立オリエンタ美術館館長):

「鉄砲製造と刀剣制作の技術に共通点が多く、わが国でも容易に作る事ができた。」「岡山では、備前長船も有名な刀剣の産地として知られていたが、この時期は、日本最大の鉄砲産地の堺の依頼を受けて鉄砲の制作に切りかえた。」「新研究で、長船は比較的早く鉄砲制作に従事したようである。長船の近くの村から鉄砲木製部分が造られたものが発見されたという。」「直家は大領主ではなく鉄砲の使用を早くできたのは、領内の長船鉄砲を使用したと考えられる。」「刀工で有名な備前長船でも名刀は見られなくなった。鉄砲生産に転じたからと考えられる。」

佐々木稔氏(神奈川大学): 「長船町史刀剣編通史」平成12年収録

「備前長船横山甚右衛門祐幸作の鉄砲一挺がある。伝統的な刀工の長船鍛冶もある時期、鉄砲を制作したことになる。」1827年(文政10年)が初見。

沢田平氏(堺鉄砲研究会):

「備前での鉄砲制作の歴史は浅く、...1827年(文政10年)が最初の記録である。にもかかわらず備前での製銃数は少なくなかったようで巷間に数多く見られ、細筒では備前筒特有の特徴が顕著で一見して備前の鉄砲と判別できる。」

2.3 弾丸用の鉛も国産品を使用

刀剣制作と鉄砲製造は技術的に共通している。宇喜多直家は「備前国産の鉛」を使用(和意谷鉦山。他に長船町磯上油杉鉦山の鉛を使用)と推定している。...中西厚・丸谷憲二説

3 初代岡山城主 宇喜多直家

1570年(元亀元年) 石山城主金光宗高を謀殺し居城を岡山に移した。

1573年(天正元年) 石山城竣工し居城とする。岡山城の城下町の基礎を築く。

4 宇喜多秀家と鉄砲

4.1 1592年 朝鮮出兵(文禄の役)

宇喜多秀家(岡山城主) 渡海総司令官の重職に就任。

朝鮮への遠征軍20万人(須川薫雄説)、16ヶ月、約6万丁の鉄砲を使用と推定。...須川薫雄説

他に、158,700人説(懲愆録)、161,500人説(看羊録・毛利家文書)有り。

短期間で朝鮮全土を占領。勝利は鉄砲のおかげであった。

朝鮮と明軍に鉄砲無し。

『懲愆録』柳成竜著に「加藤清正は鉄砲の名手なり」との記録有。

4.2 1597年 慶長の役

小早川秀秋(後の岡山城主)が総大将。

朝鮮への遠征軍14万人(須川薫雄説)、2ヶ年、約5万丁の鉄砲を使用と推定。...須川薫雄説

他に、141,500人説(懲愆録・浅野家文書)、104,500人説(看羊録)有り。

朝鮮と明軍も鉄砲使用。

新兵器の鉄砲の数(ではなくて、戦場での鉄砲使用のノウハウの有無)が勝敗を決定。

小早川秀秋には戦場での鉄砲使用のノウハウ無し。敵勢が優勢。

秀吉死去。戦いを止めて帰国。

4.3 1600年 関ヶ原合戦と宇喜多秀家

東軍 10 万、西軍 14 万、両軍合わせて 8 万丁の鉄砲使用と推定。・・・須川薫雄説

秀吉の恩義に報い、西軍の副大将として参戦。徳川家康に敗れる。

4.4 1615年 大阪冬の陣、夏の陣

東軍 20 万、西軍 10 万、両軍合わせて 10 万丁の鉄砲使用と推定。・・・須川薫雄説

「長船町史刀剣編通史」に「徳川家康が鉄砲の妙手であったことは有名である」と。

実際に鉄砲が使用されたのは島原の乱（1638 年・寛永 15 年）までの 70 年間弱である。

安土桃山時代の日本は世界最大の鉄砲生産国に成長していた。・・・須川薫雄説

5 まとめ

定兼学氏（岡山県立記録資料館館長）は「郷土史研究は、違いを探せ」と教示される。備前長船説は「記録が発見されていない歴史をどう考えるか」という問題提起である。

5.1 なぜ、備前長船説が正しいと考えるのか。

「長船町史刀剣編通史」は平成 12 年、市川俊介氏の論文発表は平成 24 年である。沢田平氏も「備前での製銃数は少なくなかったようで巷間に数多く見られ、細筒では備前筒特有の特徴が顕著で一見して備前の鉄砲と判別できる。」としている。

山下茂樹氏（備前長船刀剣博物館館長）は「記録が無い。製造されていたならば記録が残っているはず。」と教示される。しかし、鉄砲製造は当時の最高軍事機密である。池田氏との関係から「長船鉄砲鍛冶の記録は抹消された」と考える。

市川俊介氏も「新研究で、長船は比較的早く鉄砲制作に従事したようである。長船の近くの村から鉄砲木木製部分が造られたものが発見されたという。」と伝聞情報として報告している。しかし、「刀工で有名な備前長船でも名刀は見られなくなった。鉄砲生産に転じたからと考えられる。」は説得力がある。宇喜多直家がなぜ備前国の領主に短期間で成り上がることができたのかの明快な説明である。

6 今後の研究の進め方

6.1 宇喜多氏と長宗我部氏の最大の違い

長宗我部氏は鉄砲の弾丸に輸入品の鉛を使用していた。岡豊城跡から鉛製の弾丸と鉛のインゴットが発見されている。鉛同位体の分析研究からタイのカンチャナブリ県のソントー鉱山のもので推定されている。鋳型も発見されている。宇喜多直家は「備前国産の鉛」を使用(和意谷鉱山。長船町磯上油杉鉱山の鉛を使用)していた。長宗我部氏との技術力の差は明確である。・・・丸谷憲二説

6.2 鉛のインゴット製造

長船町磯上油杉鉍山の鉍石を採取して、鉛のインゴットを製造したい。鉛のインゴット復元により長船鉄砲鍛冶説の補説としたい。

鉍石の分析 倉敷市立自然史博物館 武智泰史先生の所見

坑道近くより採掘した鉍石について調べた所、ホルンフェルス中に閃亜鉛鉍，方鉛鉍，黄鉄鉍，黄銅鉍，微量の磁硫鉄鉍，磁鉄鉍が見られ，磁性は微量の磁硫鉄鉍，磁鉄鉍によるものと思われます。この鉍石は明らかに銅・鉛・亜鉛鉍石で，鉄鉍石より鉄含有率が低く，硫黄分が非常に多く（硫黄は少量でも鉄精錬の妨げになる），古代で鉄鉍石として用いることができるほどのものではないと思います。したがって，長船町磯上油杉の坑道は，銅・鉛・亜鉛を目的に採掘した跡であると思います。

7 「備前虎倉城 伊賀一族」と鉄砲

仁熊八郎氏は「明善寺合戦」の説明に「伊賀氏の力の源は鉄砲隊であるといった。しかし、そのもとになる経済力は地下資源にあったようだ。上加茂に鉄が生産され、虎倉記には三納谷の銀の生産が書かれ、三代実録では笹目の銅山について書かれている。その地方には、採掘した坑道が今も随所に見られる。硝石などもひそかに得られたのではないかと思われる。」と、硝石の可能性について考察している。

参考文献

- 1 「戦国の新兵器鉄砲の出現」市川俊介 宇喜多家史談会会報第 44 号 平成 24 年 10 月
- 2 「日本の火縄銃」須川薫雄 1989 年 光芸出版
- 3 「新訳備前軍記」柴田一 1999 年 山陽新聞社
- 4 「岡山藩の絵師と職人」片山俊介 1993 年 山陽新聞社
- 5 「日本の古銃」沢田平 平成 7 年 堺鉄砲研究会 夏目書房
- 6 「長船町史刀剣編通史」平成 12 年 長船町史編纂委員会 長船町
- 7 「鉄砲記」南浦文之 1606 年 講演資料 備前長船刀剣博物館館長 山下茂樹
- 8 「トコトンやさしい非鉄金属の本」非鉄金属研究会編 2010 年 日刊工業新聞社
- 9 「宇喜多氏岡山の戦国時代の妻たち」講演資料 大竹直子 平成 27 年 2 月 22 日
- 10 「関ヶ原後の宇喜多秀家」兼松久和（亀山城保存会代表世話人） 2013 年 3 月
- 11 「宇喜多直家の備前統一」村上岳（瀬戸内市教育委員会） 2013 年 3 月
- 12 「秀家公の没後三百五十年記念によせて」柴田一 宇喜多家史談会会報第 12 号 平成 16 年 10 月
- 13 「文禄の役における宇喜多秀家」白神康義（岡山県立記録資料館） 2012 年 10 月
- 14 「宇喜多キリシタン」高山友禅（宇喜多同族会事務局長）宇喜多家史談会会報 第 11 号 平成 16 年 7 月
- 15 「国史跡・岡豊城跡の鉛製品」高知県立歴史民俗資料館だより・岡豊風日 第 87 号 2014 年 10 月
- 16 「長船町磯上油杉調査報告書」平成 24 年 1 月 25 日 丸谷憲二
<http://b.okareki.net/wp-content/uploads/2012/02/osafunemachiisonokamiusugi.pdf>
- 17 「備前虎倉城 伊賀一族」仁熊八郎 昭和 61 年
- 18 「備前記 上道郡八」平成 5 年 備作史料研究会
「戦国大名宇喜多氏と長宗我部氏」岡山県立博物館友の会ボランティアガイド資料に加筆

平成 27 年 4 月 7 日

宇喜多鉄砲衆の記録

丸谷憲二

1 はじめに

宇喜多直家は戦場への鉄砲使用の先駆者である。火縄銃の欠点を戦術と技術によって克服している。戦場における火縄銃の弓に対する利点と欠点を確認しておきたい。

火縄銃の弓に対する利点		弓の欠点
有効射程距離が長い	約 100m	数 10m
殺傷距離	30～40m	15～20
貫通力	大きい。鎧を突き抜ける。	小さい。鎧は着き抜けない。
射手の養成機関	半年程度	長弓は若年からの訓練が必要。
火縄銃の弓に対する弱点		
弾丸の装着に時間を要する。2 発発射する間に弓は 6 本の矢を放つことができた。100m 前方から急速に接近する騎馬兵には 1 発しか発射できなかった。		
命中精度が高くなかった。やや緩い球であれば何処に到達するかわからない。火縄銃の口径にぴったり合った鉛玉の開発。放物線を描いて飛ぶ。		

見ることが出来るものや、高松城水攻め中心「信長公御傷害ノ事毛利家へ伝遣シ、是ニテモ可有和談哉否返答候へト被仰、毛利一門寄合異議様々也シカ、隆景達而因被申、無事調テ信長公ノ御侮被申、秀吉公大ニ歎ヒ、互ニ盟誓ヲ通シ、鉄砲五百挺・弓百張・旗三十本借給テ、今度上方ニテ甲合戦ノ為トシタマフ」等と他書の記述とは異なる興味深い箇所も見ることが出来る。

2 長船鉄砲の製造場所の推定

『全国鉄砲鍛冶銘 地域別分類 2001年』によれば、備前笹岡、西山、太田、大富、岡山、金川、畠田、鹿瀬、中山、長船、阿知里、上野が記録されている。刀剣には刀工名があるが、火縄銃は消耗品であり銘無しが主であり製造年の特定は困難である。

3 岡山藩の鉄砲関係扶持職人の記録

岡山藩の鉄砲関係扶持職人として、鉄砲鍛冶(銃身)、台師(台座製作)、鉄砲師(組立調整・銃として完成させる)、火薬関係は鉄砲薬師、煙硝師(火薬の製造・調合)が記録されている。

最古の記録 1674年(延宝2年) 鉄砲師2名・台師1人・鉄砲薬師1人

「長船町史刀剣編通史」は長船鉄砲の初見を江戸末期1827年(文政10年)としている。

4 高松城水攻めに用意された鉄砲五百挺

高松城水攻めに用意された鉄砲五百挺という記録は岡山では知られていない。清水宗治の自刃により多数の兵隊の命が助かったという事実を知るべきである。

5 御弓鉄砲衆

宇喜多家では御弓鉄砲衆以外に各武将に「鉄砲衆四十人 八百石」が記録されている。

『岡山市史第2巻』収録「宇喜多家分限帳」の「足軽四拾人」が、前田家蔵の「慶長初年 宇喜多秀家士帳」では「鉄砲衆四十人」と正確に記録されている。

土佐守分

- 一中島又十郎 伴土佐二入 三十石
- 一 国富源三郎 御小性二入 三十石
- 一 浮田弥三郎 御小性二入 百五十石
- 一 遠藤左吉 知行無芝 五十石
- 一 斎藤新五 御小性二入 五十石
- 一 河本三五郎 土佐二入 三十石
- 一 大村藤二郎 同人二入 今八うかへ与二郎三十石
- 一 難波弥右衛門尉 かた二入 三十石
- 一 鉄砲衆四十人 八百石
- 与力分 式万式千四百六十石五斗
- 自分 式万五千六百石
- 都合 四万八千六百拾石五斗内
- 式千石城領加 無役
- 四万六千六百拾石五斗 肥後分
- 右式千五百五拾石 山内半役分引
- 千石 慶五ヨリ無役引
- 完 四万式千五百拾石五斗

各武將に「鉄砲衆四十人 八百石」が記録

佛鉄砲組衆

- 一七〇八石云 川端丹後守
- 一七〇八石云 三指九人
- 一七〇八石云 池田與三
- 一七〇八石云 三指九人
- 一七〇八石云 完具四衛門
- 一七〇八石云 三指九人
- 一七〇八石云 河内七衛門
- 一七〇八石云 三指九人
- 一七〇八石云 新田與三
- 一七〇八石云 三指九人
- 一七〇八石云 同富源三

『岡山城主宇喜多中納言秀家 侍分限帳 慶長三年(1598年)調』

御弓鉄砲衆

- 一 御鉄砲頭 川端丹後守 三十九人 千五百六十石
- 一 池田与吉 三十九人 千五百六十石
- 一 穴甘四郎左衛門 三十九人 千五百六十石
- 一 河田七郎右衛門 三十人 千五百廿石
- 一 荻田与右衛門 三十八人 千五百廿石
- 一 芦田作内 三十八人 千五百廿石
- 一 国富源右衛門 三十八人 千五百廿石
- 一 池田与左衛門 三十八人 千五百廿石
- 一 山下少九郎 三十八人 千五百廿石
- 一 不破九左衛門 三十八人 千五百二十石
- 一 小川八右衛門 式十人 八百石
- 一 栗井三郎兵衛尉 三十八人 千五百廿石
- 一 有松次郎左衛門 三十八人 千五百廿石
- 一 飯尾太郎左衛門 三十九人 千五百六十石
- 一 中吉兵衛尉 式十人 八百石
- 一 松原久右衛門尉 式十人 八百石
- 御鉄砲衆以上五百人 知行式万石
- 一 御弓頭 山崎孫進 三十人 千式百石
- 一 森田小伝次 三十人 千式百石
- 一 同 松原久右衛門 十人 四百石
- 以上七十人 知行式千八百石

(一) 二 中村次郎兵衛と有つては紙して、除て上書
二 川端丹後守と書出(有也)

前田家蔵の「慶長初年 宇喜多秀家士帳」

6 まとめ

宇喜多鉄砲衆についての初めての報告である。岡山藩の鉄砲関係扶持職人の最古の記録は、1674年(延宝2年)「鉄砲師2名・台師1人・鉄砲薬師1人」であり、「長船町史刀剣編通史」の長船鉄砲初見、江戸末期1827年(文政10年)は調査不足と報告する。

織田信長の長篠の戦いの1575年(天正3年)より8年も早い鉄砲の戦場使用は、明確な技術力の差の期間である。火縄銃を使用した戦術上の優位性は地元の長船鉄砲鍛冶によるものと報告する。

参考文献

- 1 『火縄銃の伝来と技術』佐々木稔 2003年 吉川構文館
- 2 『全国鉄砲鍛冶銘 地域別分類』小笠原信夫 安田修 2001年
- 3 『全国鉄砲鍛冶名鑑』小笠原信夫 安田修 平成12年
- 4 『岡山藩の絵師と職人』片山俊介 1993年 山陽新聞社
- 5 「備作之史料(五)」『金沢の宇喜多家史料』平成8年 備作史料研究会
- 6 『岡山城主 宇喜多中納言秀家侍分限帳』慶長3年
- 7 『岡山市史第二巻』昭和50年 明治文献
- 8 『倉敷市史第六冊』昭和48年 名著出版
- 9 『岡山城主宇喜多中納言秀家侍分限帳慶長三年(1598年)調』 岡山県立図書館蔵
- 10 『プロローグ記された宇喜多氏』 岡山県立博物館ボランティア研修会資料